

リレー小説「すべてがTになる」1 周目

??の場合

「ついに……!! ついに完成したア!」
「ホントにこんな物で世界を救えるんですか?」
「わかってないな。この『T』ウイルスは即ち、死からの解放だよ。不老不死の究極だよ。これを人類の救済と言わずして何という?」
「はあ……それで、このウイルスをどう使っんです?」
「まだ散布するには時期尚早だ。嚴重に保管して……むっ!」
——>CAUTION! CAUTION! セキュリティシステムに異常が発生しました。二分後に隔壁を作動します——
「誰だ貴様!」
「才前ラノ研究ノ成果ヲウバイニ来タ」
「また兵器として使うのか……お前等はそうやって、いつも、いつもいつもいつも! 私たちの、研究の、研究の成果を汚す!」
「ソレガ才前ラノ役回りトイウコトダ」
「先パイ! 逃げて下さい! ここは自分が! あなたの夢は、あなたが叶えて下さい!」
「くっ……すまないっ!」
「くそっ隔壁が下りている……他に道は……」
「逃ゲキレルト本氣デ思ッテイルノカ?」
「貴様……あいつをどうしたッ!」
「解ッテイルノダロウ? 死ンダヨ泣キ叫ビナガラ、ムセビ。嘆キナガラナ」
「……。やむを得んな」
「ナニ?」
「っ! アアア!」
「才前! ウイルスヲ自分ニ……!」
「はあっはあっ……これで俺はすぐに“T”になるし、時期に貴様も“T”になる……少し早いが例の計画を始めるとしよう」
「才前ノ体……! ソレガ『T』ノ作用トデモ言ウノカ……?」

「あ、ああ……うわああアアアアアア!」
「ココニ居ルノハ不味イ——クッ!」
~~~~~  
「システムオールグリーン、隔壁閉鎖を解除します」  
~~~~~  
『T』ウイルスは空気感染型のウイルスである。進行速度は極めて遅いが、発症しきつたが最後。現状、元に戻す手段は無い。感染者は全員、例外無く体のどこからか『T』になっていく。
——以上、研究書類より抜粋

新田の場合

昼休みのチャイムが鳴り、各々の生徒が弁当を鞆やらロッカーから取り出したり、食堂へ向かって韋駄天のごとく疾走していきます。
「新田ー、一緒に弁当食おうぜー」
「あ、うん」
この人は大山。うちの空手部の次期エースで、放課後の僕の顧問でもあります。とても頼りになる人で、同期にして先輩のような人です。大山君の机と見知らぬ誰かさんの机を引っ付けて、弁当箱のふたを開ける。するとそこには我が舌の天敵が入っていました。
「That, s A 『T』……!」
「ん? あっ、それ『T』じゃん」
何故大山君が涼しい顔をしてTを凝視できるのか理解できません。僕にとつて『T』は『G』に等しい存在なのです。
「お前それ苦手なの?」
「うん……やめてくれて母さんに何回も言ってるんだけど……」
「よし、そんなら俺にまかすとけ! それ全部もらおうぞ!」
「え? いや悪いよ……ってもう食べちゃってるし……」
本当に頼りがいのある人です。そして「を食った瞬間に顔を真っ青にしているあたりが非常に大山君らしいです。
僕がそんな大山君を笑っていると、大山君はおもむろに真面目な顔に

の話声や騒ぎ声が近づくほど安心感が増していきました。校舎内へさえ入ってしまえば、さっきの大山君はもう関係がない。あれは現実じゃない。きっと教室に帰れば、いつも通り大山君が他の人の机で寝ているはずなんだ……

異変が起きたのは、僕がさがるように校舎内へと入ったときでした。静寂——耳が痛くなるような静寂。さっきまでどんどん大きくなっていた生徒たちの声が、全く聞こえない。そして、白。ドアも、靴箱も、眩しいほどの白。どうやら周りの物すべてが白色になっていているようです。かくして僕は、この無機質な白い地獄に閉じ込められてしまったのです。

木柵の場合

その日、自称「不可縛探偵」の木柵のもとへやってきた広津は、あるものを両手に持っていた。

「何だ、それは」木柵は椅子に足を組んで座ったまま、傲然と尋ねた。

「あ、これですか。これはですね、ラッキーアイテムです、今日の」

木柵の態度は気にも留めずに広津が答えたが、

「それはそれは、ずいぶんな駿担ぎだな」

木柵は皮肉げにそう返した。

「そうは言ってもですねえ、先生。今日のラッキーアイテムは『Dで始まるもの』だったんですよ」

広津が言うと木柵は鼻で笑って、

「まったく愚行だ。君が腕につけているものは何だ。今着ているものは何だ。それは時計でも、Tシャツでもないのか？」

「あつ、そうですね、気づきませんでした。いやはや、灯台下暗し。身近すぎると逆に気づかないもんですねえ」

「それに気づかなかったことはいいとしても、その『D』は常軌を逸している。そうだな、私は君が来た時にまずこう尋ねるべきだったかもしれない——」木柵は身を乗り出して、広津の顔をのぞき込み、ゆっくりと嫌味つたらしく言った。「正気か？」

ところが、広津は驚異的な無邪気さでそれを受け流して、

「やだなあ、当たり前じゃないですか。まあ、ちょっと変なことは認め

ますよ。でも、そんなに騒ぐほどのことでもないでしょう？ まったく、大げさですねえ、先生は」

木柵はしばらくの間、いたってつまらなそうに広津に目を向けていたが、やがて言った。

「それで、何の用だ？ わざわざ私の貴重な時間を浪費させに来たわけでもあるまい」

「ああ、そのことなんですけれどもですね、実は最近、奇妙な事件が起こっています……」

長々と話した広津の言葉をまとめると、この数日間に、人間が忽然と消えてしまう事件が多発しているらしい。消える人物にこれといった共通点があるわけではないが、動機のわからない失踪事件の数が異常に多くなっているようだ。個々の事件につながりがあるようには見えないので、警察の方はそれらの事件をつなげて考える気はないらしいが、失踪事件を知る関係者の中では、今この話題で持ちきりだと言っ

話を聞き終えた後、木柵は相変わらずつまらなそうに言った。

「なるほど、どんな事件が起こっているのかは理解した。だが、それがどうしたというんだ。単にその人々が個人的な理由で身を隠しただけかもしれないだろう。そんな曖昧な情報だけでは私の有限な時間を使う気にはなれそうもないな」

「でも、関係がないとは言いい切れなんでしょう？」

「もちろん言い切ることはできない。その全員が現在同じ場所に集まっている可能性だってある。もしそうなら、私もぜひ混ぜてもらいたいものだがな。今よりは面白くなりそうだ」

その時、木柵の言葉に反応したかのように、広津の持ってきたラッキーアイテムが光り出した。

「うわっ、何ですかこれ」

と広津が慌てる横で、木柵は、面白いものを見つけたとも思っているのか、薄く笑いながらじっとそれを見ていた。

光はどんどん大きくなって、やがて二人を覆い隠した。

広津と木柵が気づいた時、彼らの目に飛び込んできたのは異様な光景だった。そこに広がっていたのは、見渡す限りの高野——。

いたが、だんだん何だか視界まで曲がってきた、か、と思った時にはもう遅かった。ジエンガを中心に渦巻いたその波は、たちまち二人の少女を飲みこんでしまった。

吉野の場合

最近、俺に「面白いものを見せてやる」という者が増えた。大学の研究室を行ったり来たりして発掘の物やら修復中の物やらを物色していく俺、「吉野」は割と有名人なのだ。常に行動を共にしている友人にとっては、迷惑な話らしいが。

率先して色々見せてくれるのはありがたいが、「実はウソー」とからかってくる奴らが増えたのも事実である。困ったものだ。―そして、今回のもそれであると、俺は踏んでいる。

「ちよっと酒のつまみ買ってきてよ。その間に準備しておくから」

教授はニコニコしながらそう言った。さしずめ、俺が買い物に行っている間に「ドッキリ大成功」というような札を作ってわくわくしながら待っているであろう。今の俺には、そうとしか思えない！

「と、いうわけで…トンズラさせてもらいましよう！」

スーパリーの袋を指先で回しながら俺は呟いた。酒のつまみは買ったが、自分用だ。さすがに、いつまでも騙されている吉野ではないのだ。実は、先ほど述べた友人も教授と一緒に待たせているのだが、まあ分かってくれるだろう。俺が帰ってこないと知った時の教授の顔を思い浮かべると、なんだかとても気分が良くなってきた。スーパリーの袋の回転は既に扇風機のようになっている。

「あっ」

ある瞬間、それは俺の指を離れて飛び上がると、とても美しい裂け方をして中身を四方八方へ飛び散らせた。

「……やっちまったなあー」

仕方なく散らばったものを一つ一つ拾い集める。すると不意に視界が陰った。急に曇ったというより、背後に何かが現れて日の光を遮った、と言っほうが正しいだろう。ゆっくりと振り向くとそこには――

「ええーっ……」

道いっばいに、「それ」が広がっていた。ひたすら白く、景色を四角く切り取ったかのような。人工物にも、自然物にも思えない。おそろおそろ

近づき、落ちていた石を投げしてみると、それは白の中に吸い込まれて消えた。俺の好奇心がむくむくと湧き上がってくるのを感じる。

「お、面白そうだな！ 人も入れるのだろうか。あ、あいつも呼ぼうかな」

俺は、よくひよんなことから世界存続にかかわるような事件に巻き込まれてしまう、まるでショートショート的主人公のような特性を持っている。それにいつも巻き込まれる友人には「怪しいモノには近づくな」と言われているのだ。俺は携帯電話を取り出した。

『緊急事態発生☆ 先に帰っておいてくれ』

メールを出すと、音速で返信が来た。

『人を待たせておいてその態度か！ 緊急事態って絶対嘘だろ！ 今どこにいる』

うむ、怒っている。呼び出しづらい。

「さて、今回は俺だけが行かせてもらおう！」

気を取り直して、俺は白い「それ」に手を当てた。少し抵抗があるが、ゆっくりと飲み込まれていく。

「ますます面白そうだ！」

俺は勢いをつけて、白に飛び込んだ。

白草の場合

電気1つ点いていない部屋の中。カーテンの僅かな隙間から漏れる夕日の光が部屋をほのかにオレンジ色に染めている。窓の外から、同じ年ぐらいの女の子たちの楽しそうな笑い声が聞こえた。今頃あいつらは何の罪悪感も抱かずに、のうのうと楽しく生きているのだろうか。さんざん私を玩具にして、人の人生を狂わせて、それでもなお笑っているのだろうか。そんなの絶対に許さない。あつてはならない。私は唇を噛みしめた。不登校になってからは、あいつらを不幸にするためにネットや本を漁り、様々な呪いを試してみた。が、どれも効果はいまひとつだった。

「でも、これなら。この『T』を使った呪いなら、きっとあいつらは…」

私は『T』を部屋の床に描いた魔方陣の上に置いた。用意していた果物ナイフで左手の小指を切り、その指から出た血を『T』にたらし呪文を

唱える。

「『T』よ。我が願いを叶えよー」

唱えた瞬間、白い光が部屋をつつんだ。

「な……！」

白い光は私を飲みこんでいった。

気付けば私は白いタイルの床に座っていた。立ち上がり、周りを見渡す。

「ここ……どこ？」

私はいつの間にか知らない教会の中にいるようだ。

恵奈の場合

「はあ……」

珍しく彼女一人になった家中、仕事場兼自分の部屋のベッドに座り、怪原恵奈は艶つぼいたため息をついた。

長女・次男・次女・三女を学校へ送り出し、ニートの長男もアニメのイベントか何かで朝早くに出て行ってしまった。下の四人はまだしも、長男がこんな時間から家にいないというのは年に数回ほどのことで、長年一緒に暮らしてきたとはいえどもやはり慣れない。

このベッドで一緒に寝てくれる者がいなくなつて、何年になるだろう。えっと、次女と三女が今年で十五歳だから……あ、まだ三年か。甘えん坊の彼女らは、小学校を卒業するまで恵奈と寝床を共にしていた。まあ、今年で高二の次男は中学一年の終わりくらいまで時折布団に入ってきたが……。

十五といえば、夫が行方知れずになつて今年で十五年だ。未だ音沙汰はない。どこかでのたれ死んでいるのではないかとよく知り合いには言われるが、恵奈はそう思っていない。というより、死んでいないと断定している。だって、彼は『死なない』のだから。

(さて……久しぶりにおひとりさまの昼食だわ。どうしましょう、どこか外食にでも行ってみようかしら)

子どもたちには、なるべく自分の愛情を込めた料理を食べてほしいが、一人となるとまた勝手は違う。一人暮らしでは生活が乱れるタイプである。

ちなみに日々の生活費・養育費は、長年続けている株のデイトレードで稼いでいる。自慢ではないが、ほぼ負けたことはない。これに関して恵奈は、ある裏技を持っているのである。もちろん裏技にばかり頼っているわけではなく、ちゃんと基礎を学び、ほぼ極めたうえでやっているが、損害が出そうなときの保険としてだ。

国道沿いのうどん屋にでも行こう、大好物のきつねうどんに穴子とさつまいもの天ぷらでもトッピングしてやろう、と、朝食をとった直後にも関わらずお昼の打算を始め、少し鼻歌が出る。今日は天気もいい、うどん日和だ。

心躍るまま、家事に手をつけるためベッドを立ち、恵奈は部屋のドアを開けようとした、のだが。

「あら？ 何これ」

全く予想していなかったものが、ドアの前に置いてあった。皿の上に乗った——『T』である。

なぜこんなものがここにあるのだろう。まあ、放っておくわけにもいかないし、とりあえず持つて出るとしようか……。

今度こそ取っ手をしっかりとつかみ、とりあえず洗濯でもしようと、恵奈はドアを開けた。

しかし——『不思議』は、再び恵奈を阻んだ。

「……………え？」

それは確かに、怪原家の廊下に通じているはずのドアだった。そのはずだ。

だが、目の前に広がる景色はどうだろう。高層ビルが立ち並び、きちんと舗装された真新しい大きな道路が走り、広めの歩道には新緑の街路樹が植えられている。

「……………」

とりあえず、目をこすった。それからほったたをつねった。ついでに胸を揉んでみた。

「……この感触は、夢じゃない」

謎な発言をして、とりあえず自分の部屋があるはずの後ろを振り返ってみる。

どこだ、ここは。オフィスビルのエントランスを自分の部屋にした覚えなど、神に誓ってないのだが。

「どうやら、面倒なことに巻き込まれてしまったようね」

ふううーっと再びため息をついて、辺りを見回してみる。いかにも現代的な都会の街並みである。だが奇妙なことに、大通りには一台も車が走っておらず、歩道を歩いている人間も一人もいない。走るための道路、歩くための歩道、座るためのベンチ、停めるための駐車場だけが、使われるのを待っているように存在している。

常人ならば多少のパニックに陥るだろうが、残念ながら彼女は常人ではない。彼女の頭脳は、この状況から、すでにおおかたの結論を導き出していた。

おそらく何者かが、わたしをここに連れて来たのだ。目的はわたし個人の殺害か、子どもたちに脅しをかけるためか……思惑は計り知れないが、わたしにとっていいことではないことは間違いない。

「……いいわ、立ち向かってあげる。早く帰って家事を済ませて、きつねうどん恵奈スペシャルを食べに行くんだから」

オフィスピルのドアをぱたんと閉め、『T』を手に持ったまま、恵奈は歩き出した。